

ビジネスの自由な進化を支援する 「REAL IT PLATFORM」

ビジネスを進化させていくためには、変化に迅速に対応可能な「柔軟性」、基幹業務における絶対的な「信頼性」、そして複雑化していくITリソースの「快適」な利用ならびに運用という3つの要件を満たした次世代のIT基盤が必須となる。NECは、こうした企業システムのニーズにこたえていくため、新しいITプラットフォームのビジョン「REAL IT PLATFORM」を提唱している。

中長期的な製品開発も含めたIT基盤のビジョン

NECは2006年7月18日、「REAL IT PLATFORM」という名の新たなITプラットフォーム・ビジョンを発表した。各通信事業者によって強力に推し進められている「NGN (Next Generation Network: 次世代ネットワーク)」の登場によって、ますます加速化しつつあるユビキタス社会。「REAL IT PLATFORM」は、そうした社会を支えるために、ハードウェアからミドル

ウェアまで、中長期的な製品開発も含めたNECの今後の方向性を示したものだ。

この「REAL」という言葉には、2つの意味が込められている。1つは、NECが積み重ねてきたオープン・ミッション・クリティカル (OMCS) による基盤構築の実績を基に、最適な次世代IT基盤を企業の実況にあわせてオンタイムの「現実解」として提供していくという姿勢。もう1つが、NECがメインフレームやスーパー・コンピュータの開発で培ってきた経験とノウハウを活かし、ハードウェアとソフトウェアを

一体とした革新的なIT基盤のテクノロジーにより、企業にとって「真」の次世代IT基盤を開発していくという決意である。

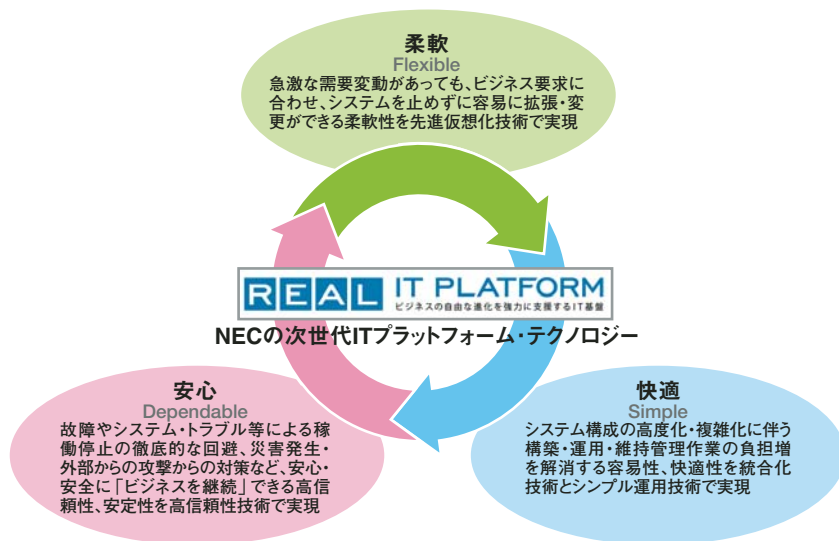
そして、NEC ITプラットフォーム販売推進本部 統括マネージャーの宮崎智美氏は、「REAL IT PLATFORM」を実現する主要なテクノロジーについて、次のように説明する。

「ユビキタス社会の進展によって、一般消費者を含めたエンドユーザーが、直接システムにアクセスしてくるような状況の中で、予測不可能な急激な負荷の変化にも迅速に対応できる『柔軟性』、24時間365日ダウンすることなくサービスを提供し続ける『信頼性』、複雑化していくITリソースをシンプルに使える『快適性』の3つが特に重要な要件となります」

ハードウェアからデータベースまで一貫したプロビジョニング

この「REAL IT PLATFORM」を推進するにあたり、大きな鍵を握るのが、オラクルが持つさまざまな技術との融合である。データベースは情報システムにおける中核ともいえる重要な構成要素であり、

NECの次世代ITプラットフォーム・ビジョン「REAL IT PLATFORM」



NECはこれまでもオラクルのデータベース製品を自社のハードウェアやソフトウェアと組み合わせることで、数々のミッションクリティカルな大規模システムの構築を手がけてきた。

そして、この取り組みを更に一歩進めるために、2005年10月、NECは米国オラクルとの間で「Strategic Technology Alliance (STA)」と呼ぶアライアンスを締結した。

「ミッションクリティカルなシステムのインテグレーションを行う際に、オラクル製品とNEC製品を最適なかたちで組み合わせられるようにします。また、そのソリューションをタイムリーにユーザー企業へ提供していきます」と、宮崎氏はこのアライアンスの目的を語る。

その成果は、早くもかたちとなって表れ始めている。2006年9月20日、NECがオラクルと共同で発表した、ハードウェアからデータベースまでの一貫したプロビジョニング (ITリソースの動的再配置) もその1つだ。これは、NECのプラットフォーム統合管理ソフトウェア「WebSAM Sigma SystemCenter」と、オラクルのデータベース運用管理ソフトウェア「Oracle Enterprise Manager」の連携によるもの。同日に販売に向けた活動を開始した「Sigma SystemCenter Oracle RAC連携モジュール」ならびに「Enterprise Manager Connector Framework」の2種のソフトウェアによって実現される。

「これによって、運用管理者はハードウェアやOS、データベースなどの各コンポーネントを意識することなく、負荷状況に

NEC ITプラットフォーム販売推進本部
統括マネージャー

宮崎智美氏

応じたデータベース・リソースとアプリケーション・リソースの動的な割り当てや、サーバ障害時における代替ノードへの迅速な切り替えを容易に行うことが可能となります」(宮崎氏)

Oracle GRID Centerでも 高速フェイルオーバーを追求

STAを通じて、NECとオラクルの両社が重点的に取り組んできたもう1つのテーマが、高速フェイルオーバーの実現である。

NECはこれまで、ミッションクリティカルなオープンシステムの案件において、インテルのItanium2プロセッサを搭載した統合エンタープライズ・サーバ「NX7700iシリーズ」をクラスタ構成にすることで、高度な可用性を確保するという方法を提案してきた。しかし、万一トラブルが発生した際には、業務の再開までに1時間程度を要する必要があるなど、必ずしもすべての企業ニーズにこたえられていたわけではない。

そこでNECは、Oracle RAC (Real Application Clusters) に着目し、この機能を使ってどこまで短時間でフェイルオーバーが可能になるのかを検証するとともに、最適な機能実装のあり方や設定・チューニングの方法を見いだすために、企画レベルからオラクルと共同作



業を進めてきたのである。

そして、この活動はOracle GRID Centerにおいても継続され、更なる可用性の向上とフェイルオーバーの高速化を目指して、検証を重ねていく計画だ。NECは、その成果を即座にシステム・インテグレーションの現場で活用していく意向を持っており、一方でオラクルも製品に適宜反映させていくという。

また、先述のプロビジョニング機能の連携についても、「その対象をプラットフォーム統合管理ソフトとデータベース運用管理ソフト間に限定するのではなく、今後は運用統合管理ソフトの『WebSAM』との連携も視野に入れながら、自律コンピューティングの進展を目指していきます」(宮崎氏)としており、NECはOracle GRID Centerでの活動を通じ、「REAL IT PLATFORM」のビジョンを一步ずつ確実に具現化していく考えである。